

9月9日の北朝鮮における事象に関するとりあえずの解析結果

平成28年9月16日
日本国際問題研究所
軍縮・不拡散促進センター
(CTBT国内運用体制事務局)

1. 所見

9月9日の事象について、NDC（国内データセンター）-1（日本気象協会）において、ウィーンに本部を有する包括的核実験禁止条約機関（CTBTO）の国際監視制度（IMS）下で運用されている地震波観測所で検知された複数の波形データを解析した結果、自然地震の波形とは明らかに異なる、爆発事象の特徴を有する波形が得られたことから、自然地震ではなく、核爆発を含む人工的な爆発事象であると結論づけることができる。

但し、核爆発であったとの技術的な検証は、今後、放射性核種（希ガスまたは微粒子）の検出により最終的に確認される必要がある。現時点で、NDC（国内データセンター）-2（日本原子力研究開発機構）が監視している日本およびその他のIMS観測所のデータから核爆発を裏付ける証拠は得られていない。

2. 震源の位置等は以下のとおりと推定される。

- ・発生時刻 2016年9月9日午前9時30分（日本時間）
- ・北緯 41.2927°
- ・東経 129.0440°
- ・深さ 0 km
- ・実体波マグニチュード（mb） 5.1

(注) マグニチュードは機関ごとに使用データや算出方法が異なるため、値が異なる場合がある。
現在、NDC-1ではさらに解析を継続中であり、今後、マグニチュードの数値および発生位置は微修正される可能性がある。気象庁マグニチュード（Mj）の発表値は5.3、CTBTO準備委員会暫定技術事務局（PTS）発表の実体波マグニチュードは5.1。

3. 上記2. の震源等についてのコメント

(1) 震源

震源は 2006 年以降の 3 回の爆発事象、及び本年 1 月の爆発事象時の位置（北朝鮮北東部豊溪里）とほぼ同位置であり、過去の爆発事象の直近で発生したものと推測される。

(2) 深さ

地表付近の極めて浅い場所で発生したと考えるのが妥当と判断される。

(3) マグニチュードと規模の推定

過去の爆発事象のマグニチュードは、2006 年：4.0～4.2、2009 年：4.6、2013 年：4.9、2016 年 1 月：4.8 であり、今回は 5.1 となった。爆発の規模については、爆発物周辺の充填の状況やそれらを取り巻く岩盤の状況に依存して地震波の振幅が変化するため、マグニチュードだけから爆発の規模を推定することは困難である。仮に、前回と全く同じ条件で実験が実施されたとした場合、今回の爆発規模は、前回本年 1 月事象と比べて大きく、かつ、過去 4 回の事象の中でも最も大きかった可能性がある。

4. 微気圧振動の解析結果

直近の観測点（いすみ、ロシア・ウスリースク）では当該事象に起因するようなシグナルは検知されなかった。

(参考) 波形等については別添参照。

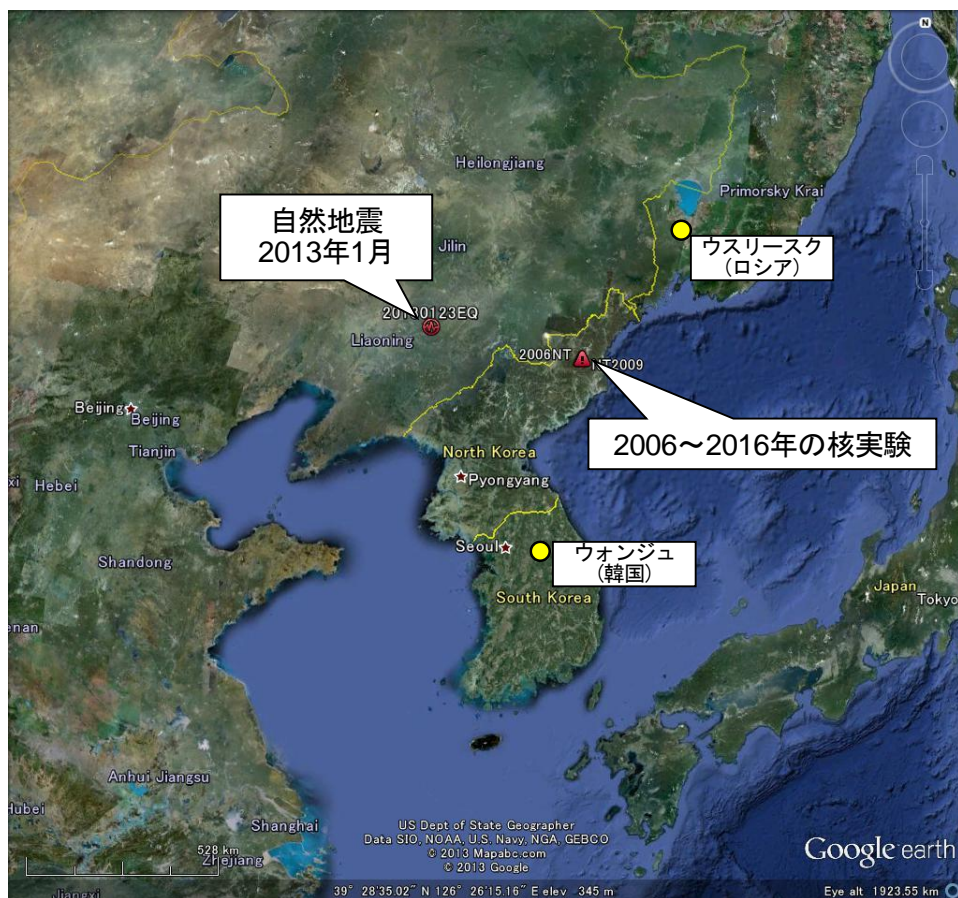
北朝鮮直近の観測点における地震波形

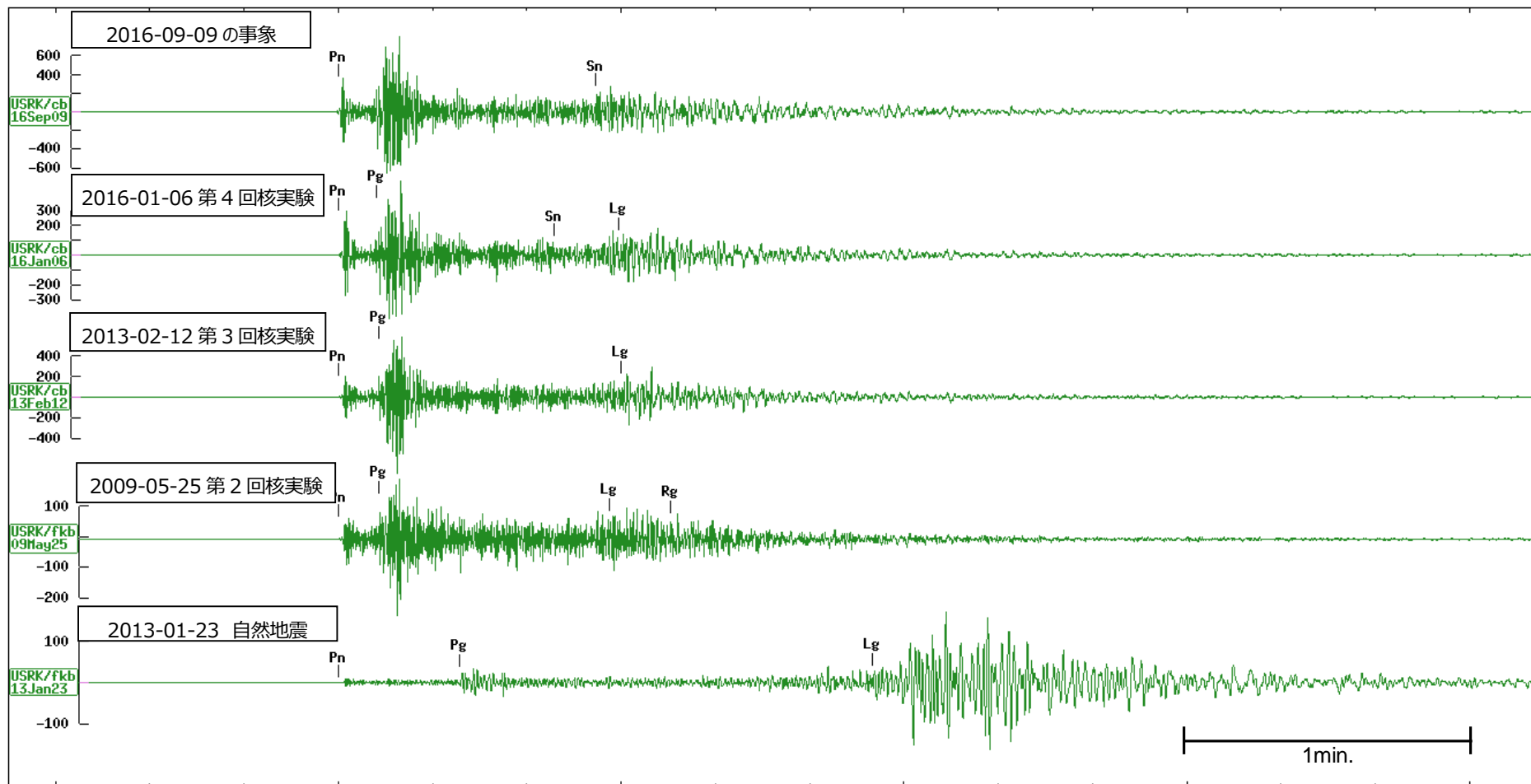
National Data Centre-1

今般、CTBT 地震観測点で観測された地震波形について、

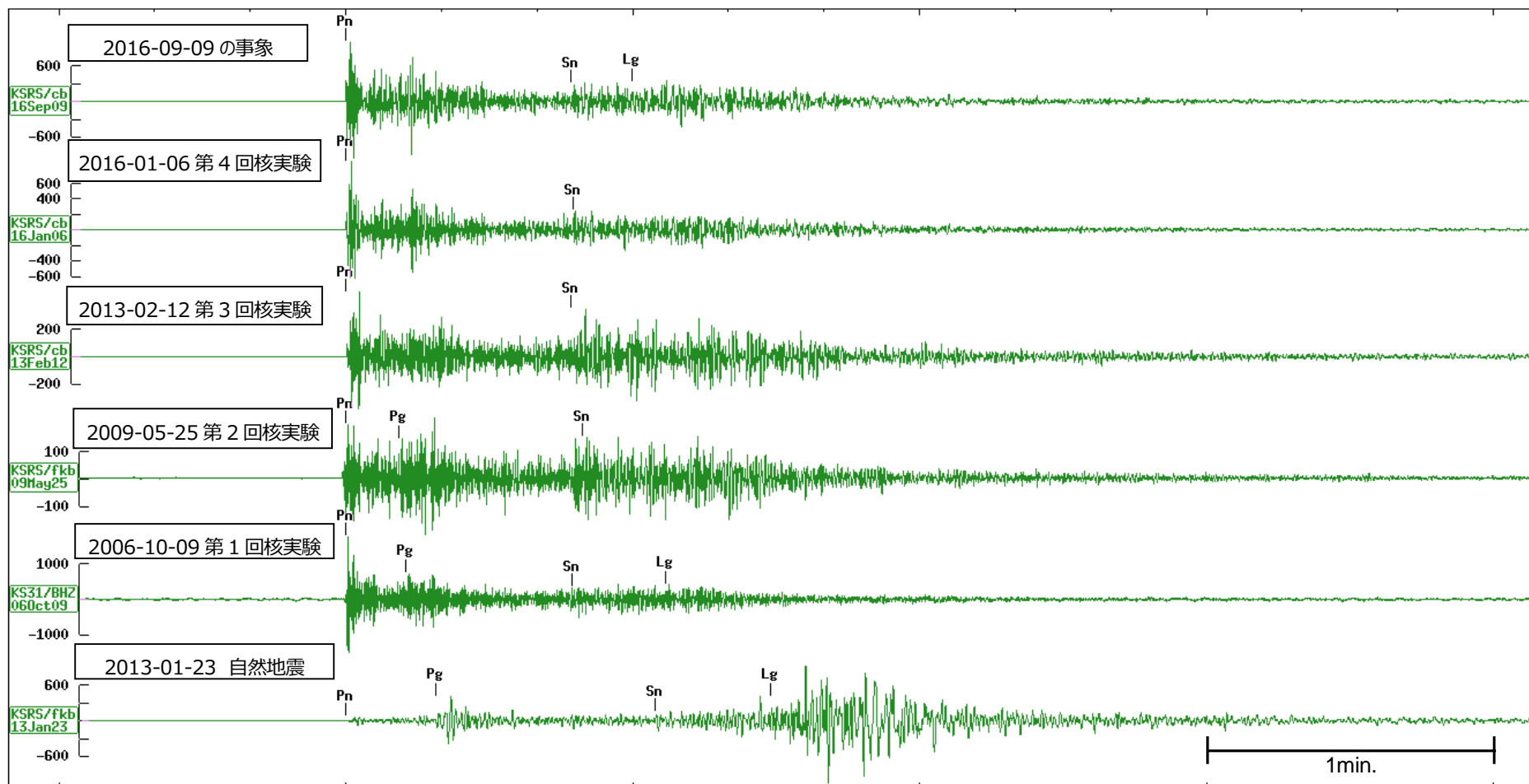
- 北朝鮮における 2016 年 1 月の第 4 回核実験
- 北朝鮮における 2013 年 2 月の第 3 回核実験
- 北朝鮮における 2009 年 5 月の第 2 回核実験
- 北朝鮮における 2006 年 10 月の第 1 回核実験
- 北朝鮮付近のごく浅い自然地震 (2013 年 1 月)

による地震波形を比較

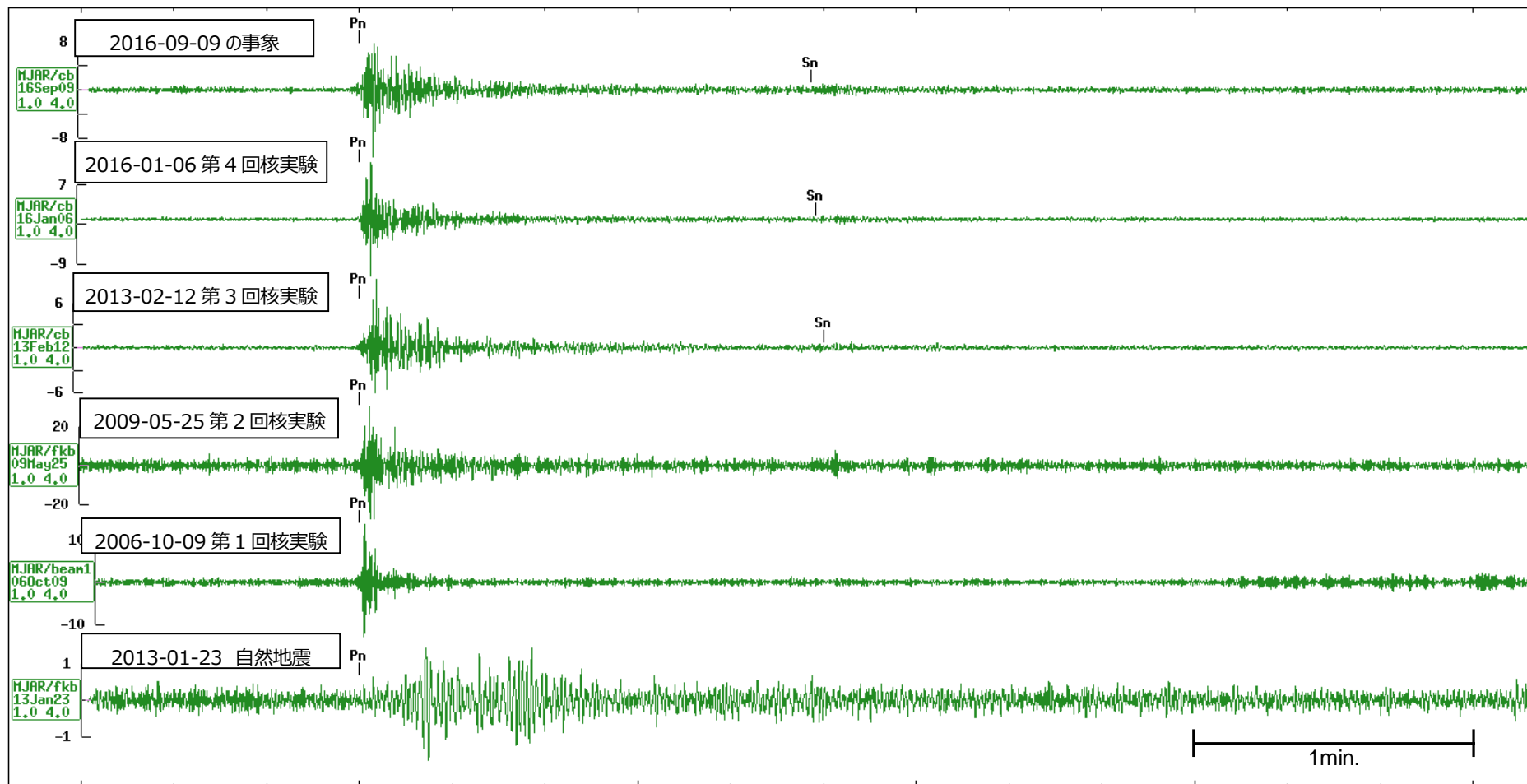




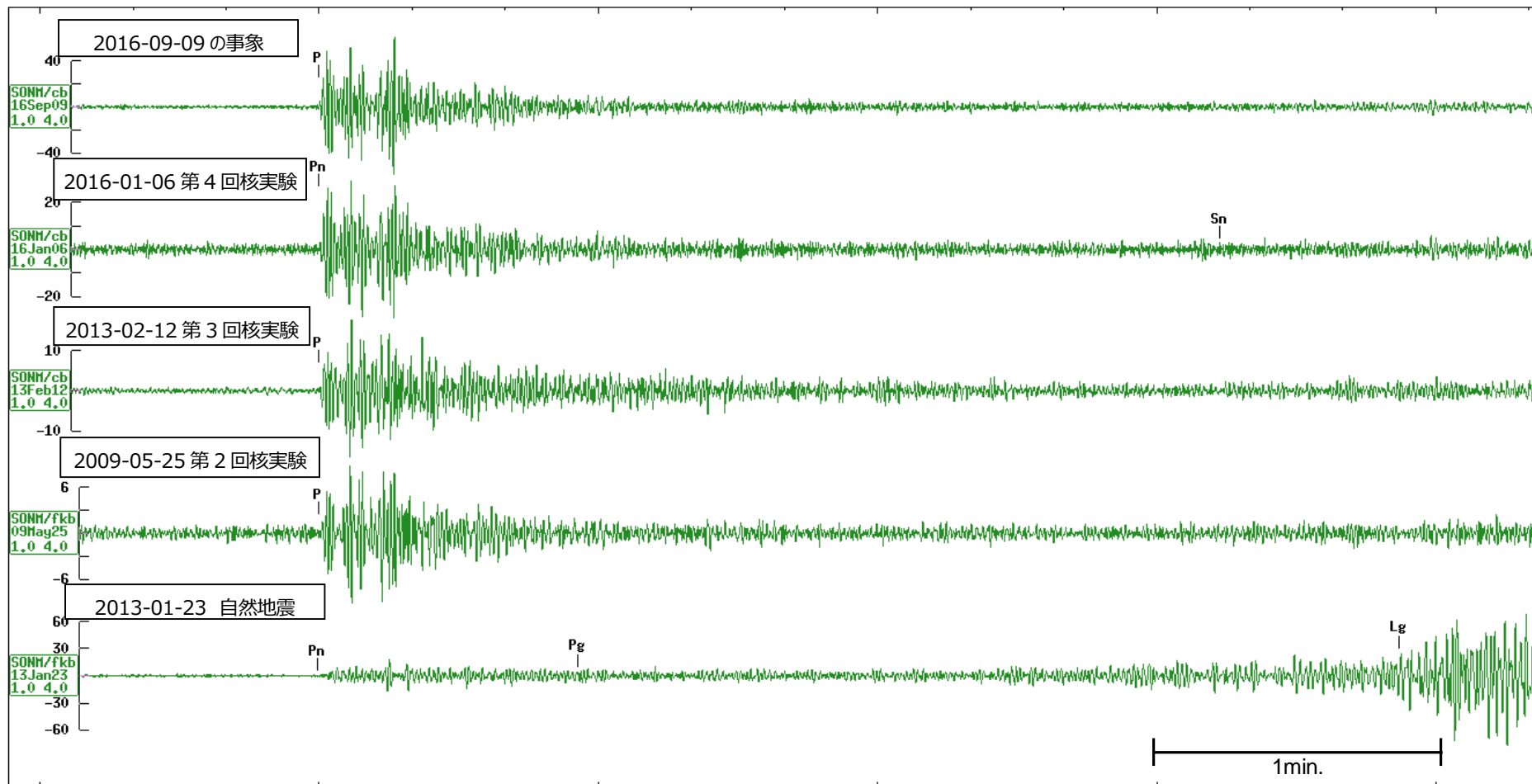
USRK（ロシア・ウスリスク）観測点における観測波形の比較（震央距離 400km、フィルタなし） ※2006年10月の第1回核実験時は未運用



KRSR (韓国・ウオンジュ) 観測点における観測波形の比較 (震央距離 440km、フィルタなし)

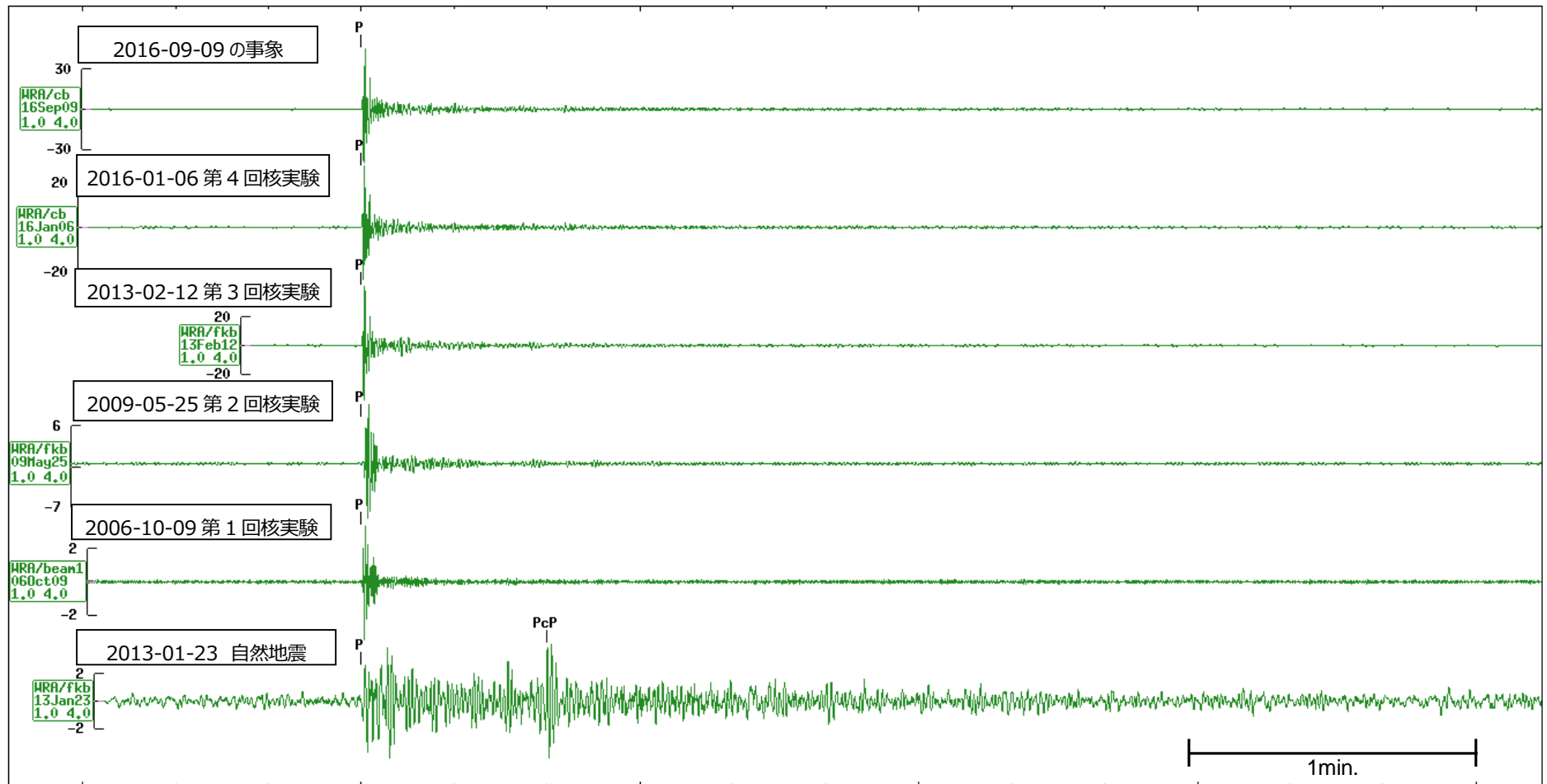


MJAR（日本・松代）観測点における観測波形の比較（震央距離 960km、バンドパスフィルタ帯域：1.0~4.0Hz）



SONM (モンゴル・ソングノ) 観測点における観測波形の比較 (震央距離 1,930km、バンドパスフィルタ帯域 : 1.0~4.0Hz)

※第1回核実験時は明瞭なP波が観測されず



WRA（オーストラリア・ワラムガ）観測点における観測波形の比較（震央距離 6,800km、バンドパスフィルタ帯域：1.0～4.0Hz）